

平成 17 年度論文

漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』  
における下町描写に関する研究

ううせいじん

**【論文】**  
**漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』**  
**における下町描写に関する研究**

**目次**

---

<b>第1章 序論</b> .....	1
1-1. 研究の目的	1
1-2. 研究対象	1
1-3. 研究方法	2
1-4. 既往文献	2
1-5. 本論文の構成	2
<b>第2章 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』に描かれた下町空間の特徴</b> .....	3
2-1. 「こち亀」における下町空間の抽出と分類	3
2-2. シーン描写の概観	3
2-3. カット描写の概観	4
2-4. メッセージの分析	4
2-5. 下町描写の特徴	11
<b>第3章 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』に描かれた下町空間の変遷過程</b> .....	12
3-1. 「こち亀」連載年表と下町描写の変遷	12
3-2. 秋本の意識の変遷	13
3-3. 読者の反響	15
3-4. 時代背景	17
<b>第4章 秋本治の表現と世界観</b> .....	18
4-1. 劇画と秋本	18
4-2. 他作品にみる秋本のメッセージ	18
4-3. 原体験としての下町	20
<b>第5章 結論</b> .....	21
5-1. 研究のまとめ	21
5-2. 総合的考察	21
<b>あとがき</b> .....	22
<b>注釈</b> .....	23
<b>参考文献</b> .....	27
<b>付録</b> .....	29
別表1 「こち亀」における下町描写（シーン）一覧	29
別表2 「こち亀」における下町描写（カット）一覧	58
別表3 「こち亀」連載年表	72

## 第1章 序論

### 1-1. 研究の目的

秋本治の『こちら葛飾区亀有公園前派出所（以下「こち亀」）』は、東京の下町を舞台に警察官らが巻き起こす日常の騒動がコミカルに描かれた漫画である。

本作は1976年以降、集英社の『週刊少年ジャンプ（以下「ジャンプ」）』誌上で30年に渡って連載されている人気作品であり、2006年2月現在、連載1400回、単行本148巻（総発行部数1億4000万部<sup>1)</sup>）という記録的な数字を更新し続けている。

「ジャンプ」は、毎週の「読者アンケート」（人気投票）の結果によって連載の継続を判断している<sup>2)</sup>。たとえ有名作家の作品であっても人気ランキングの下位になればすぐに打ち切られる編集方針は、「過酷なサバイバルゲーム」と評される<sup>3)</sup>。作品の連載が持続するためには、作者の伝えるメッセージや世界観が読者に共感され続けることが必要となる<sup>4)</sup>。

「こち亀」は、その「サバイバル競争」に耐え、読者の共感を獲得し続けてきた作品であると言える。では、30年の長きに渡り「こち亀」が支持され続けてきた理由はどこにあるのだろうか。

本作は既に、主人公のキャラクター性<sup>5)</sup>、オーソドックスなギャグと4段割りを基本とした古典的な構成<sup>6)</sup>、緻密な取材力<sup>7)</sup>、ターゲットの広さ<sup>8)</sup>、時代に即したテーマ設定<sup>9)</sup>などで評価されているが、本研究では「東京の下町」が作品の舞台並びにテーマとなっていることに着目した。

秋本自身が下町を作品の「欠かせない要素のひとつ」と意識している<sup>10)</sup>ことでも明らかのように、「こち亀」が長期連載を達成した理由の1つは、「下町空間」すなわち秋本の描く世界が読者の幅広い共感を得てきたことにあると考えられるのである。

その、読者の支持を受けてきた「下町空間」

とはどのようなものであろうか。本研究の第一の目的は、「こち亀」における下町描写の特徴を、描写に込められた秋本の意識とともに明らかにすることである。

また、30年に及ぶ連載の過程で「こち亀」に描かれる世界は変わり続けている。とりわけ作者の意識には大きな変化が見られる。今でこそ『こち亀』で下町を描き続けたいと発言し、「下町の描き手」を自負する秋本であるが<sup>11)</sup>、連載当初は「下町を描く」という自覚や興味がなかったと語っている<sup>12)</sup>。

ここには現在の作者の意識との大きな乖離が見られるが、その変化はどのように起こったのだろうか。連載30年の歴史を紐解き、秋本の下町に対する意識および「こち亀」における下町描写の変遷を追い、その変化がいつ・どのように起こったのか、その過程を分析することが本研究の第二の目的である。

本研究で取り扱う「漫画」は、大衆文化の1つであり<sup>13)</sup>、時代を反映する鏡として機能している。漫画作品に描かれた情報、とりわけ「こち亀」のような長期連載作品に掲載された莫大な情報資源<sup>14)</sup>について知見を得ることは、それが描かれた時代や社会の持つ価値観の一端を把握する、意義深い試みであると考えられる。

### 1-2. 研究対象

集英社発行のジャンプ・コミックス単行本『こちら葛飾区亀有公園前派出所』1～148巻（1977 - 2006）に掲載された1413話（「ジャンプ」本誌ベースでは1976年29号・42号～2005年31号、35～36・7合併号までに掲載された1415話<sup>15)</sup><sup>16)</sup><sup>17)</sup>）に描かれた「下町空間」<sup>18)</sup>を対象とした。

また、掲載誌である「ジャンプ」はじめ秋本の諸著作や発言が掲載されている文献の講読も並行して行った<sup>19)</sup>。

### 1 - 3. 研究方法

本研究は、秋本の描く下町空間と作者の意識の特徴および変化の過程を網羅的に検証するものである。具体的には、以下の通り研究を進めた。

#### (1) 下町描写の特徴分析

まず、「こち亀」において描かれる下町空間の特徴を把握するため、単行本 1413 話の中から秋本が描いた下町空間の描写を悉皆抽出し、リスト・アップした。この際、「こち亀」世界の構成要素を、実際の物語が展開する「シーン」と、扉絵・挿絵からなる「カット」の 2 点に分類し、その各々に描かれた下町空間の分析を行った。なお、「シーン」はさらに場所別・パタン別 (8 類型) に分け、「カット」も扉絵と挿絵をそれぞれパタン別 (2 類型) に分類した。

次に「こち亀」世界に込められる秋本の意識を把握するため、「シーン」のリストを用いて秋本が下町に対して抱く意識や世界観が特徴的に反映されているシーンの抽出を行い、ストーリーの類型化とメッセージの分析を行った。

#### (2) 下町描写の変遷過程の分析

(1) で得られたリストならびに秋本の著作や発言の載った文献を元に、作品の「連載年表」を作成した。年表には 30 年間の「社会情勢」「作品の展開」、「特徴的な下町描写」、「作者の発言・意識」をプロットし、「こち亀」における下町表現および作者の意識の変遷を視覚化した。

ここで得られた結果に基づき、「作者の意識」「読者の反響」ならびに「社会背景」の 3 点から、「こち亀」における下町描写および秋本の意識の変遷過程を分析した。

### 1 - 4. 既往文献

漫画の研究については、手塚治虫研究を中軸として<sup>20)</sup>、数多くの作家論<sup>21)</sup>や表現技法研究<sup>22)</sup>が展開されてきた。また、1 つの作品を細部まで追究するいわゆる『謎本』と呼ばれ

る研究書籍<sup>23)</sup>も、サブカルチャーの分野で盛んに出版されている。

しかし、「こち亀」に関しての研究は殆ど存在しない。主人公のキャラクター性に着目した評論は存在する<sup>24)</sup>ものの、本研究のように下町空間の描写を取り扱ったものは存在しない。

また、メディアによって発信された記述上の都市空間の研究には、小説やエッセイを対象としたもの<sup>25)</sup>、校歌や歌謡曲を対象としたもの<sup>26)</sup>、新聞記事や情報誌を対象としたもの<sup>27)</sup>、マンション広告を対象としたもの<sup>28)</sup>などが見られる。漫画についても、1980 年代以降の東京を描いた漫画群における東京と各作品との文化的相関に着目した研究がみられる<sup>29)</sup>ものの、個々の作品については殆ど見受けられず<sup>30)</sup>、とりわけ「こち亀」に着目したものの、また漫画によって描かれた下町空間に着目した研究はみられなかった。

### 1 - 5. 本論文の構成

本章では、研究の目的および研究方法について述べた。

第 2 章では、「こち亀」における下町描写の特徴並びに描写に込められた秋本の意識を明らかにする。

第 3 章では、「こち亀」30 年の連載史を追い、秋本の対する意識及び下町描写がどのように変化したのか、その過程を探る。

第 4 章では、秋本の表現方法ならびに世界観の把握を通して、「こち亀」における下町描写の特徴をみる。

以上を踏まえ、第 5 章で結論を述べている。

## 第2章 『こち亀 葛飾区亀有公園前派出所』に描かれた下町空間の特徴

### 2-1. 「こち亀」における下町空間の抽出と分類

「こち亀」1413話において描かれた下町空間がどのようなものであるかを検証するため、下町空間が描かれる場を、実際の物語が展開する「シーン」<sup>31)</sup>と、扉絵および挿絵からなる「カット」<sup>32)</sup>の2つに分類し、各々リスト化した(別表1・2)。なお、下町描写を「シーン」と「カット」に分類した理由は、秋本自身が下町の描写を「本編」と「扉絵」「挿絵」(秋本は「小さな背景のコマ」と表現)とに分けて考えているためである<sup>33)</sup>。

リスト・アップの結果、シーンまたはカットのいずれかで下町が描写される話は、作品全体の64.5%に当たる911話に達することが示された。

### 2-2. シーン描写の概観

#### (1) シーン描写リスト

別表1で示したものは、「こち亀」における下町描写(シーン)のリストである。

分類項目はシーンが描かれた「年」、単行本の「巻」「タイトル」のほか、具体的な「下町の描写シーン」の説明、シーンの展開する「場所」、シーンをタイプ別8種類に分類した「タイプ」、補足的説明を加える「備考」欄からなる。

シーンのタイプは、内容の特徴から、A: 日常風景を描いたもの、B: 祭りを題材としたもの、C: 思い出・人情話、D: 下町を題材としたギャグ、E: 作者のメッセージが反映されているもの、F: 下町案内、G: 時事テーマ、H: その他の8種に分類した<sup>34)</sup>。

#### (2) シーン描写の分析

別表1のリストにより、「こち亀」における下町描写(シーン)は605話721シーンであり、作品の42.8%の話に下町のシーン描写が登場していることが示された。これらをタ

イプ別に見ると、図2-1の通りとなる。

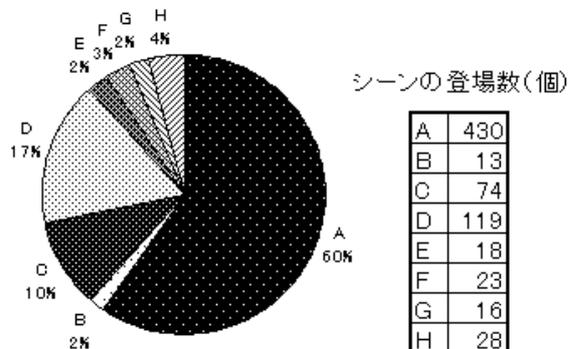


図2-1 「こち亀」の下町シーン描写(タイプ別)

これによると、「こち亀」において登場する下町描写(シーン)のうち、日常風景を描いたものが群を抜いて多く(430シーン・59.6%)、日常ベースのリアルな世界として下町空間が描写されていることが明らかとなった。これにギャグ(16.5%)、思い出・人情話(10.3%)が続いた。なお、作者のメッセージが反映されているものは全体の3.2%にみられた。

舞台として取り上げられた場所についてみると、作品の主舞台である亀有・葛飾区が全体の66%と際立ち、次いで主人公の出身地である浅草(13%)、および上野・神田の描写が目立つことが判明した(図2-2)。これらを合計すると、全体の85%を占める。

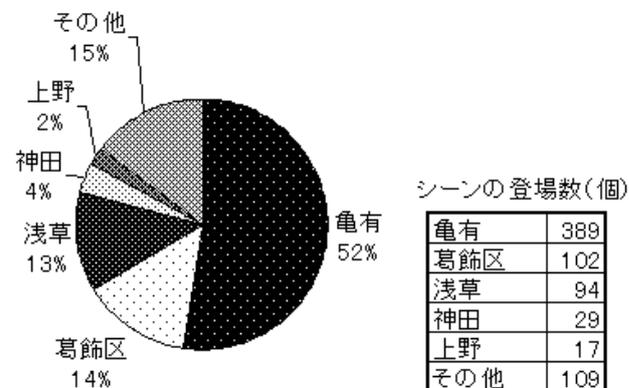


図2-2 「こち亀」の下町シーン描写(場所別)

※1つのシーンに複数の場所が登場する場合がある。

### (3) 秋本の発言に基づく考察

秋本は、著書で自らが生まれ育った亀有界限、幼いころの遊びの体験に根ざす「憧れの街」としての浅草、小さい頃からいちばん慣れ親しんだ街であるという上野、また「江戸っ子の本場」としてのイメージを抱き、浅草・上野に匹敵する憧れを抱くようになった神田への思い入れをそれぞれ語っている<sup>35)</sup>。このことから、作者の体験に根ざす思い入れが、**図 2-2** で明らかとなった作品の舞台設定にそのまま投影されてきたことが読み取れる。

## 2-3. カット描写の概観

### (1) カット描写リスト

**別表 2** で示したものは、「こち亀」における下町描写（カット）のリストである。

分類項目はシーンが描かれた「年」、単行本の「巻」「タイトル」、タイプ別のカウントを行った「扉絵」「挿絵」のほか、シーンの補足的な説明を加える「備考」欄からなる。

表中では、「扉絵」「挿絵」とともに A・B のタイプ分類を行った。「タイプ A」は本編と場所上の繋がりを持って描かれたカットで、「タイプ B」は本編とは無関係に描かれたカットである<sup>36)</sup>。

タイプ別の分類を行った理由は、秋本が下町の取材の際に撮った写真を、本編とは無関係なカットとして意識的に描きこむケースがある<sup>37)</sup>ことを根拠とする。「タイプ A」は本編に基づいて作成された付随的なカットであるのに対し、「タイプ B」は本編と無関係に、秋本が下町の風景を意識的に描き込んだ結果であり、この 2 つを区分することは意義あることだと思われる。

### (2) カット描写の概観

**別表 2** のリストにより、「こち亀」における下町描写（カット）は、延べ 650 話 1067 カットに登場していた。扉絵は 316 カット（タイプ A が 53、B が 263）、挿絵は 751 カット（タイプ A が 134、B が 617）であり、扉絵の 83.2%、挿絵の 82.2%が「タイプ B」であ

ることが判明した。

### (3) 秋本の発言に基づく考察

秋本は、当初は取材でいい写真が撮れればただそれを扉絵や挿絵に取り入れて描写するだけであったが、取材を重ねるにつれて下町の懐かしい景色がどんどん東京から消えていくことに気づき、「消える前に描いて残しておかなければ」という気持ちが芽生えたと述べている<sup>38)</sup>。そして、「景色が消えてしまっただけからでは、読者に伝えることができない（中略）扉絵で下町風景を描き続けているというのはそれがいちばんの理由かもしれない」としている<sup>39)</sup>。ここには、下町の風景を「こち亀」に描写することで伝え残したいと考える秋本の意識が読み取れる。扉絵・挿絵ともタイプ B が 8 割を超えていることは、まさに「下町の風景を残したい」と考える秋本の意識の表れであると言えよう。

## 2-4. メッセージの分析

前 2 項において、「こち亀」において下町空間がどのように描かれているのか、その様相が明らかとなった。特に前項で検討したカット描写については、「下町の懐かしい風景を残したい」という秋本の意識が働いていることが示された。

本項では、**2-2** で検討したシーン描写に再び着目し、秋本がどのようなメッセージを持って下町空間を描いているのか、その意識を探る。

### (1) 重要シーンの抽出

分析に当たっては、まず**別表 1** を元に、作者のメッセージが色濃く反映されているシーンを「重要シーン」として抜き出した。その結果を踏まえ、秋本が「こち亀」に投影する下町空間へのメッセージを類型化する。

本項で論ずるのは、以下の 5 話に登場するシーンである。

①53 巻「浅草ラブソディ」、②70 巻「和服リバイバル」、③99 巻「佃島慕情」④125 巻「超神田

寿司の"のれん分け"」、⑤127 巻「祭りの日に・・・  
纏の少女時代編」

## (2) 主人公の行動パターン

重要シーンの分析に先立ち、**別表 1** の作成過程で明らかとなった主人公・両津勘吉巡査長(以下「両津」)の行動パターンに触れておく。以下に、両津の行動の類型を示す事例を挙げる。

39 巻「もしも我が家が・・・」

版權画像の為  
図画省略

A

住宅情報誌を見た両津、東京の不動産価格が高いことに驚いた上で、「なんだってみんな東京にあつまりやがるんだまったく！ ネコもしゃくしも東京にきやがって！ だがら土地もあがっちゃうんだよ！」と文句を言う (A)。

40 巻「東京住宅事情」

新卒で派出所に配属された後輩(法条)と両津の世間話。両津は、東京の現状を嘆く。  
両津「なんでおまえ東京の大学にきたんだよ」  
法条「教師や親にすすめられてです」  
両津「地元だって大学あんだろ・・・？」  
法条「ええ あるにはありますが・・・」  
両津「毎年春になるとみんな東京の大学にきやがって 東京の人口が増えちゃうんだぞ その度に ただでさえいっぱいなのに」  
「学生ばかりじゃなく 芸能人やわけのわかんねえ職業のやつも東京に住みつきやがって！ おかげで緑がどんどんなくなって アパート マンションだらけだ」  
「おまえらのおかげで 東京がわけのわかんねえ町になっちゃうんだよ！」 (B)  
法条「私にそういわれても困りますよ」

版權画像の為  
図画省略

B

版權画像の為  
図画省略

C

両津「じゃ なんで警視庁に来るんだよ！ (後略)」「私は江戸っ子としてこのような状態をだまていられん 実にくやしい！」 (C)  
法条「しかし現在では 地方出身者のほうが多いんですよ 東京は・・・」  
両津「そうなんだよ そいつらのほうが なぜかわしより 六本木や渋谷にくわしいんだ！ 上野や浅草なら わしの方が勝つのだが！」  
「だから本心としては おまえをこの東京に住ませたくないっ わかるな！」

54 巻「列車よいとこ」

中川(両津の部下の大富豪巡査・会社社長)の部下が高級外車で派出所に寄る。  
それを見た両津、「ベンツのリムジンなんかで下町にきやがって まったく！」と怒る。

56 巻「のぞき魔生け捕り作戦」

版權画像の為  
図画省略

D

銭湯にのぞき魔が続出、それを聞いた両津は「地上げ屋の嫌がらせかもしれない」と語った上で、「なんにしてもふるさとの東京がだんだん住みにくくなっていくのがしのびない！」と、嘆く (D)。

57 巻「両津代表取締役」

中川(両津の部下の大富豪巡査・財閥一族。都市開発会社社長を兼務)が、両津に対して「東京改造計画」が進んでいることを伝える。  
西暦 2048 年の東京モデル (E) を見せられて「な

んだこりゃ!？」と驚いた両津、「東京改造計画  
ってのは 江戸っ子を東京から追い出してるだ  
けだろうが!ちがうか!？」と憤る (F)。

版權画像の為  
図画省略

E

版權画像の為  
図画省略

F

その後も、「何が日本のためだ!なんでもかんで  
も東京に集中させやがって こんな事したらま  
すます暮らしにくくなるだろうが (中略) この  
辺でちょっところらしめんといかん! 江戸っ子  
として」とさらに怒り、中川を縛り上げる (G・  
H・I)。

版權画像の為  
図画省略

G

版權画像の為  
図画省略

H

版權画像の為  
図画省略

I

#### 58 卷「ワクワク忘年旅行」

版權画像の為  
図画省略

J

警察署の旅行で、宴会の部屋を間違えた両津。宴  
会をしていた銀行員に「まったく下品な!」と言

われたことに腹を立て、「てめえらこそなんだ!  
地価高騰の片棒をかつぎやがって!おかげで東  
京はメチャクチャにねっちまったじゃねえか!」  
と怒鳴る (J)。

#### 79 卷「駄菓子屋カルト王」

テレビの特集で駄菓子屋が面白おかしく取り上  
げられる。評論家が「下町は不思議な地帯 (ミス  
テリー・ゾーン) です」と言うのを聞き、「大  
きなお世話だ! どいつもこいつも下町をおも  
ちゃにしやがって!」と怒る (K・L)。

版權画像の為  
図画省略

K

版權画像の為  
図画省略

L

#### 85 卷「ザリガニ合戦!？」

版權画像の為  
図画省略

M

版權画像の為  
図画省略

N

かつてザリガニ釣りをした田んぼに向かった両  
津、あまりの変貌振り (M) に苦い顔をする (N)。

以上で示される通り、主人公・両津は、自  
分の住まう下町が変化したり、特別な存在と  
規定されることに対して、驚いたり、嘆いた  
り、怒ったりする「変化を嫌う頑固なおじさ  
ん」として描かれていることが分かる。この  
パターンは、次に示す重要シーンにも引き継が  
れている。

### (3) 重要シーンの分析

(2)で明らかとなった主人公の行動パターンを踏まえ、ここでは(1)で示した重要シーンを分析する。次の①～⑤は、それぞれのシーンをそれぞれ分析したものである。

### ① 「浅草ラブソディ」

a) 部下を連れて浅草寺への初参りに向かった両津は、浅草の実家に部下を招く。部下を風呂に誘うが、この後外国へ遊びに行く用事がある、と断られる。



A



B

それを聞き「正月くらい日本にいろ！」と怒鳴る両津(A)。それに対となつて、「我われの時代とはちがうんだ！ 物事を自分だけの視野で語ってはいかん！！」とたしなめる両津の父親が描かれている(B)。このシーン自体は下町の描写ではないが、「対となるキャラクターが変化を拒む両津をたしなめる」という構図は、1つの類型として以下の各シーンに引き継がれている。

b) 元旦の早朝、両津と父親が浅草の街中を散歩するシーン。両津が浅草の変化を実感しながら歩いている途中、「ありゃ！？ 新劇場があんなビルになっちゃった！」と驚く。そこで父親がすかさず、「これも時の流れよ！しかたねえ」と合いの手を入れる(C)。



C

その後さらに散歩を続ける二人。奥の路地に進んだところで父は、「まだまだ昔ながらの浅草は息づいているぜ！ いくらビルが建ち町が変わろうと下町の人情は変わりやしねえさ！」と両津に諭すように会話を締めくくっている(D)。



D

### ② 「和服リバイバル」

同級生の家に立ち寄った両津は、同級生が外国人と結婚していたことを知り、驚く(E)。



E



F

「呉服屋だから日本的美人の嫁をもらうといつてたくせに！」と責める両津に、「世の中時代とともに変わるんだよ」と弁明する友人(F)。さらに、「この浅草だって時代が止まっているように見えるが 意外にどんどん変わってるんだぜ！」と続け、両津を諭す(G)。



G

### ③ 「佃島慕情」

a) 部下の中川と一緒に、祖父のいる佃島へ向かった両津。町並みのあまりの変わりように、「なんてこった！」と嘆く(H)。祖父に出会った両津は、「こんな姿にされて 地元として一言言ってやれ！」と怒る(I)。



H



I

しかし祖父は殆ど気にしているそぶりを見せず、両津は「なんてやつだ」とさらに憤る(J・K)。



J



K

b) さらに、「たかがそれぐらいで驚いてはいかん！」と、祖父は長屋を立ち退きしてしまったことを両津に伝える (L・M)



L



M



N

「なんで反対しなかったんだ！一番古い長屋だったんだろが！」とがぶりよる両津に、祖父は「マンションのてっぺんに住まわせてくれるという条件が気に入ってな！ わしは高いところが好きだ」と釈明 (N)。

その後、「駄目だ・・・こいつ！全く執着がない」「下町情緒と高層ビルとの違和感が凄いぞ」などと嘆き続けの両津に、「大切なのは住んでる人の気持ちですよ」と論ず祖父と中川 (O)。



O



P

祖父はさらに、佃島の祭りが今でも活況であることを告げた上で、「ビルが建とうがマンションが出来ようが町内のつながりには全然関係ない」と述べて場を締めくくっている (P)。

c) 新しいものを積極的に取り入れる両津の祖父は、一方で、「中身」の古さを改めてしまったわけではない。続くシーンでは、マンションに住みながら、鍵をかけずに生活している様子が描かれている (Q)。



Q



R

「昔っからカギなどかけた事がない！長屋と同じ 出入り自由だ」「マンションなんて長屋が積んであると思えばどうって事ない！ご近所さんが一杯で賑やかでいい！」と話す両津の祖父 (Q・R)は、外見的变化を受け容れる一方で、中身の意識は「昔のまま」なのである。

秋本はこのストーリーを描いた5年後に、「新しいものを取り入れながら、懐かしいものを引き継いでいく」すなわち、外見の変化を受け容れ、中身は残していく下町像を理想と語っている<sup>40)</sup>が、本シーンは、その理想の投影の1つと言えそうである。

#### ④「超神田寿司の”のれん分け”」

両津が住み込みで働く神田の寿司店に、女性米軍人のジョディーが弟子入り祈願 (S)。



S

版權画像の為  
図画省略

T

それを受けた両津、「女で外人というのは・・・ちょっと・・・(中略)封建的な世界だから・・・」と、否定的な見解を示す(T)。

そこへ寿司店の女将が出てきて、「かまわないよ女だろうと外人だろうと 肝心なのは技量だよ」と両津を一蹴する(U)。

版權画像の為  
図画省略

U

#### ⑤「祭りの日に・・・ 纏の少女時代編」

両津が、寿司屋の女将に「神田明神がコンクリート製だった」と指摘。すると女将は「(両津の出身地・浅草の)浅草寺だってコンクリート製じゃないか」と反論。口論がはじまる。

版權画像の為  
図画省略

W

そこへ寿司屋の娘が「コンクリート合戦してどうすんだよ」とたしなめ、女将も「そうだよバカ！肝心なのは中身だよ」と両津を論ず(W)。

#### (4) シーンの類型化

以上の5シーンを類型化すると、以下のようになる。

主人公(両津)は――

- 変わり行く下町世界を見て、驚いたり、嘆いたり、否定したりする(マイナスの視点)  
→ 外見の変化を拒む  
一方で、

対となるキャラクターは――

- 変わり行く(下町)世界を「肝心なのは中身」と捉え、受け容れを示す(プラスの視点)  
→ 外見の変化は受け容れる  
→ 肝心なのは中身と考える。住まう人の気持

ち、人情が変わらないことを重視  
→ 両津を論ず

このように、下町の外見的な変化を拒む両津と、肝心なのは中身と考え、外見的な変化は受け容れるよう両津を論ずキャラクターが対となって描写されていることが明らかとなった。

#### (5) 考察

(4)によって、「主人公は変わり行く下町を嘆くが、それと対になるキャラクターがく大切なのは中身であり、外見的な変化は受け容れなくてはならない」と論ず」という1つのパターンが導かれた。

「下町の変化を嘆く」主人公の視点は、作者の意見の一側面であると考えられる。しかし、対となって提示される「肝心なのは中身であって、外見的な変化は受け容れることが大切」という視点こそ、秋本が下町空間に投影する中心的なメッセージであろう。

90巻「ペット・マンション！」では、作者が両津の台詞を用いて、次のようなメッセージを発している(図2-3)。

版權画像の為  
図画省略

版權画像の為  
図画省略

図2-3 「取り敢えずいらっしゃい」の下町文化  
※両津「本来 江戸下町文化ってごった煮じゃん！ いろんなやつが江戸に来て長屋に集まるだろ そこには見栄も気取りもないんだよ 長屋の形状からみんな「お隣さん」だからな すぐ親しくなれるわけよ」「だから取り敢えず「いらっしゃい」だよ それから考えりゃいい！」  
中川「懐が深いですね！」

このシーンからも、変化に寛容な下町像(懐の深い江戸下町文化)を思い描く作者の意識

が読み取れる。

## **2 - 5. 下町描写の特徴**

本章では、「こち亀」における下町のシーン描写ならびにカット描写を概観した。

結果、カットにおいては「下町の風景を残す」ために意識的な描写がなされていることが分かった。

シーンにおいては、日常の下町風景がコンスタントに描かれる一方で、外見的な変化に寛容な下町空間を理想とする作者の意識が投影されていることが明らかとなった。

### 第3章 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』に描かれた下町空間の変遷過程

#### 3-1. 「こち亀」連載年表と下町描写の変遷

##### (1) 年表の作成

30年の連載の中で、下町描写および秋本の下町に対する意識がどのように変化したのか探るため、「連載年表」を作成した(別表3)。なお、本章での議論は全てこの年表に基づく。

年表には、時代毎の「できごと」や「ジャンプの展開」「秋本の他作品」「こち亀の展開」およびその時期に特徴的な「下町描写」を記載したほか、各文献から得られた「秋本の発言・意識」、「作品の特徴」を記述し、下町描写および秋本の意識の変遷を視覚的に追えるようにした。年表中の「下町描写」の記載は、2章で論じた下町描写の「シーン」および「カット」のリスト(別表1・2)を基としている。

##### (2) 下町描写の変遷

別表3より作中の下町描写の総合的な変化を見る。

連載最初期の1976年～77年にかけては作品の設定が固まっておらず、模索状態が続いた。1978年になると下町世界にアクション物の要素が加わり、現在に通じる破天荒な世界観が確立した(転換点①)。翌79年に作者が意識して下町世界を描くようになると、作品の設定そのものも固まり、下町描写も定着した(転換点②)。1984年になると、作中に単なる下町描写だけでなく、変わり行く東京を不安視する秋本の意識が込められるようになり(転換点③)、1987年には作中に「変化を許容する」という秋本の核となるメッセージが投影されるようになった。なお、この頃から下町のシーン描写が急増している(転換点④)。1992年に「消え行く風景を残したい」という秋本の意識の下にカット描写がなされるようになると、以降、下町描写は安定をみた(転換点⑤)。現在も下町描写の安定的な推移が続くが、1999年には「いつ終わってもいいように、今まで試していなかったことをや

っていこう」という作者の意識の下、作品の第二本拠として神田の寿司店が登場し、「こち亀」世界に広がりが見られた(転換点⑥)。

以上の推移を、「シーン」および「カット」の2点に分けて詳細に検討する。

##### ①シーン描写の変遷

連載最初期から日常をベースとした下町描写が見られる。1977年には両津の実家(浅草)が描かれ、78年からは下町に戦車や潜水艦などが登場する非日常的なストーリー(破天荒な下町空間)も登場した。徐々に現在の「こち亀」で見られるような下町世界が展開するものの、総じて試行錯誤の段階であると言える。

連載4年目の1979年を境に、下町の描写が現在のスタイルに近づく。両津が「祭り好き」であることや「下町に詳しい」ことなど、主人公の諸設定が明らかにされるのもこの年である。作品の設定がほぼ固まる翌80年には、後に定番化する「両津の思い出話(少年時代)シリーズ」<sup>41)</sup>の第1弾が描かれたり、浅草の名所紹介ストーリーが描かれたりするなど、下町描写は一層の定着をみる。

1984年になると、両津の口から変わり行く東京への不安が語られはじめ、秋本の意識が作中に描写されるようになる。さらに1987年になると、第2章で論じた秋本の理想とする「変化を受け容れる」下町像が投影されるようになった。この頃から下町描写は加速し、翌88年以降91年までは、下町そのものを題材としたストーリーが頻繁に描かれている。

1990年代以降は、安定的に下町の描写が行われるようになる。日常の下町風景がコンスタントに描かれる一方で、作中に秋本のメッセージの投影が続けられた。また、上野などを題材とした「下町案内」もの、連載xxx回記念の「両津の少年時代シリーズ」、夏場に描かれる「東京のお祭り」のストーリー<sup>42)</sup>が引

き続き話数を重ねている。

なお 1999 年以降は、亀有に次ぐ作品の第二本拠として「神田の寿司一家」が登場し、神田界隈の描写が急増した。

## ②カット描写の変遷

連載初期には、第 5 話の扉絵に既に下町風景が描かれるなど、いくつかのカット描写がみられる。ただしいずれもストーリーに付帯して作成されたカットであった。1978 年後半に、初めて本編と無関係のカット（挿絵 B）が登場した。翌 79 年には、扉絵 B も登場している。

1981 年後半～82 年を境に、カット B が急増、以降定着をみる。これはちょうど、作品の設定が固まり、下町描写（シーン）が定着する時期と重なっている。

扉絵 B については、80 年代中盤まで殆ど描写されることがなかったが、1989 年後半～90 年に急激に増加し、以降現在まで定着している。特に秋本が「消え行く風景を残すために扉絵を描く」と意識した 91 年から 95 年にかけては扉絵 B の描写のピークで、「隅田川にかかる橋シリーズ」と呼ばれる 11 連作の扉絵が描かれたり（92～3 年）、描写対象地のキャプションが挿入されたりし、秋本が扉絵に注力していく様子が伺える。

## 3 - 2. 秋本の意識の変遷

### (1) 秋本自身の考える意識の変化

まず、秋本自身によって自覚された意識の変遷を検討する。

1993 年以降、「こち亀」が誕生してから現在に至るまでの経緯について、秋本が各所で振り返りをしている。ここでは、そこで語られた秋本の発言を基に、秋本の意識の変遷を追う。

<連載前～模索期<sup>43)</sup>：1976～1978>

元来、劇画に入れ込んでいた秋本は、アメリカンポリス・アクション劇画を「ジャンプ」に投稿しようと考えていた。しかしアメリカの警察の資料は容易に入手できず、人一倍デ

ィティールにこだわるタイプの秋本には辛いことであったという。

そこで方針を転換し、資料を手に入れやすい日本の警察のアクション劇画を描こうと思い至った。しかし日本が舞台では派手なアクション劇画はなじまないと悩み、「何でもあり」の世界であるギャグ漫画を描くことを決意した。

秋本は「山止たつひこ<sup>44)</sup>」というペンネームで「こち亀」を描き上げ投稿、1976 年に「ジャンプ」誌に掲載された。これが現在の第 1 話である。

これが好評を博し、同年中に連載が開始された。

秋本は当時を振り返り、投稿作に過ぎない「こち亀」が長期連載になるとは考えもせず、「次はアクション劇画を描こう」と考えていたという。舞台を亀有としたのも住んでいる場所が亀有だったから、という理由でしかなく、「下町を舞台にしたというより、舞台にしたところがたまたま下町だった」程度の認識でしかなかったと明かす<sup>45)</sup>。

とはいえ、リアルな劇画に傾倒していた秋本にとって、ギャグ漫画の世界は未知の領域であり、連載を重ねると「ユーモラスな話を考えるのにすっかりハマってしま」い<sup>46)</sup>、こち亀世界を描き続けた。

<アクション物の要素を付加：1978>

連載が軌道に乗ると、秋本は本来の志望であるアクション物を描きたくなったという。しかし「こち亀」の連載に追われ、なかなか描く機会が得られなかった。そこで「こち亀」の世界にアクション物の要素を付加するようになった。

秋本はこれを、作品のターニングポイントとしている<sup>47)</sup>。それは、「ちょっとおとなしめの漫画」が、現在の「破天荒な漫画」に変質した瞬間であった<sup>48)</sup>。それがいつなのか具体的な年数に言及した文献は見られないが、**別表 3** から、それが 1978 年であることが分かる。

秋本はこの試行錯誤の段階で、キャラクタが制約なく作品世界で動き回れるよう、主人公・両津の視点を「大人」から「子ども」に移し、それに併せてキャラクタそのものを劇画調から親しみ易いタッチに変えていった。これにより、今まで以上にキャラクタが生き生きと動き出すようになったと言う<sup>49)</sup>。

確かに、初登場時の頃のキャラクタの顔(図 3-1、1 巻「始末書の両さん」と比較して、この頃の顔(図 3-2、12 巻「バイク野郎」)は丸みを帯び、キャラクタに動きが出ているようである。

そして、「このころから、(作中に)下町が自然と出てくるようになった」と秋本は振り返っている<sup>50)</sup>。



図 3-1 連載最初期の両津 (1976)



図 3-2 タッチの変化した両津 (1978)

<下町の描き手を意識する：1979>

秋本は当初、下町を自覚して描いていたわけではなく、「何となく、自分が生まれ育った地域を、マンガの中に登場させただけ」であった。しかし下町の話が展開するにつれ、「東京の下町ってこうなんですわ」「浅草ってこういう街なんですわ」という読者の感想が寄せられるようになったという<sup>51)</sup>。その様子を、秋本は次のように述べている<sup>52)</sup>。

「読者の反響がすごくてビックリ！『浅草に住んでいるけど、あんな場所があるなんて知らなかった』とか、『東京には行ったことがないけど、とっても面白かった。もっと、やって欲しい』なんていう手紙が、山のように届いた」

それ以来、秋本は「読者がそんなに喜んでくれるなら・・・」と思って、下町のことを色々調べてマンガの中に活かすようになった」という<sup>53)</sup>。秋本が「下町を描く」ことを意識した瞬間であった。

この大きな転換を、秋本は「現在の『こち亀』のスタイルを作るきっかけは、読者から学んだといえる」と語り<sup>54)</sup>、読者によって意識させられたことを強調する。このことは、「『こち亀』で下町を描くというよりも、『こち亀』が僕に下町を描かせている」という発言<sup>55)</sup>からも読み取れる。

なお、この変化の起こった具体的な時期・ストーリーについて言及した文献は見られないが、別表 3 から、浅草の描写が短期間に集中した 1979 年であると断定できる。

<以降の秋本：1980->

下町を意識して取材をするようになった秋本は、「意外なことの連続」で、「取材するほどに知らなかったことがいろいろ出てくる。改めて東京という街の面白さ、奥深さを実感した」と語っている<sup>56)</sup>。

その後、取材と下町描写が重ねられるにつれ、秋本の下町への想いは、作中に下町に対するメッセージが投影されるほどに深まっていった。1993 年になると、「下町そのものが僕の大事な趣味」と発言する<sup>57)</sup>までに至っている。

## (2) 客観的に見た秋本の意識

秋本が「下町を描く」ことを自覚したのは、1979 年のことであった。秋本自身は、それまで下町を描いていることの自覚はなく、むしろ、下町物に全然興味がなかったとも語っている<sup>58)</sup>。

しかし、連載初期の描写から客観的な事実を追うと、秋本の抱く意識には以下の点で疑義が生ずる。

a) 連載第 3 話で早速、亀有・香取神社の「お祭り」の話が登場している(1 巻「祭りとフータロー」)ほか、翌年も引き続き香取神社のお祭りを取り上げたストーリーが描かれてい

る(6巻「祭り太鼓」)。秋本はこれを、「意識せずに」描いたと振り返っている<sup>59)</sup>。

b) 連載第5話で早速、下町の風景が細かく描かれた扉絵が見られる(図3-3)。



図3-3 1巻「気のあうふたり!？」扉絵

c) 1978年にはすでに、主人公の出身地・浅草の描写が行われている。秋本は、両津の出身地・浅草の名が(意識せずに)「すんなりと出てきた」と振り返っている<sup>60)</sup>。

d) 「ジャンプ」巻末に載せられている作者のコメントでは、秋本が「亀有の香取神社は今年七百年の本祭り。下町っ子の血がさわぎまくるのデス!」(76年41号)、「夕方、亀有の横丁をはいと縁台で夕涼みのおばあちゃん。いい風情だ。」(「ジャンプ」33号)と発言するなど、下町を好んでいるかのような表現が見受けられる。

e) 1978年に秋本が描いた読切作品『となりの金ちゃん』。久里浜を舞台としたストーリーであるにも関わらず、出てくる風景が「どこか下町っぽい」(図3-4)ことを秋本が自ら指摘している(1999年)。このことを秋本は、「意図したわけじゃなくて、そういう雰囲気が好きなので自然にそうになってしまいました」と回想している<sup>61)</sup>。



図3-4『となりの金ちゃん』における久里浜

以上を見るに、秋本の「読者の反響を受けて、下町を意識して描くようになった」という自覚とは逆に、実際の秋本はすでに無意識的に下町に対する潜在的な意識を抱いており、読者の反響を受けることで、その意識が喚起されたと考えられるのである。

すなわち、秋本は決して「下町に興味がなかった」わけではなく、連載当初から「無意識的に好んで下町を描写していた」と捉えられるのである。

### 3-3. 読者の反響

前項で示されたように、読者は秋本の描く下町世界に共鳴し、秋本はそのような読者の姿勢を強く意識して「こち亀」を描いてきた。

事実、1996年に連載1000回を迎えた秋本は、長期連載の秘訣を問われ、「読者と自分が楽しめるマンガを描くように気をつけていた。自分だけが楽しいマンガは問題がありますし、読者は楽しいけど自分は描いていて楽しくないというマンガは描きたくありませんでした」と語っている<sup>62)</sup>。本項では、そのことを示す特徴的な事例を挙げる。

#### (1) 人気作品投票

秋本の描く下町世界が読者によって支持されていることは、表3-1、3-2、3-3によって裏付けられる。

表3-1は1993年に実施された「おもしろ話ベスト10」<sup>63)</sup>、表3-2は1996年に実施された「連載1000回達成記念企画”みんなで選ぼう『こち亀』ベスト10!”(「読者が選ぶ傑作選」)<sup>64)</sup>、表3-3は2001年に実施された「面白かった話ベスト1」<sup>65)</sup>であり、いずれもジャンプ本誌で告知されたアンケートに基づく「こち亀」の人気作品投票である。

いずれの投票も、それぞれ「こち亀」でこれまでもっとも面白かった話を投票するという形態で行われている。回答総数は明らかにされていないものの、莫大な作品群の中から各時代の「ジャンプ」読者が面白いと考えるストーリーが選ばれており、読者の反響を知るための有用なデータである。

表3-1 「おもしろ話ベスト10」(1~76巻)

順位	タイトル	下町物
1	57巻「浅草物語」	●
2	73巻「突撃！クレーンゲーム」	
3	47巻「江戸っ子すし講座」	
4	59巻「おぼけ煙突が消えた日」	●
5	79巻「ベビースッター両津」	●
6	74巻「クレーンゲームチャンピオン大会」	
6	60巻「体力株式会社」	
8	65巻「FAXします！私のすべて」	
9	36巻「両さんの長崎旅行(1~4)」	
9	54巻「両さん人間ドッグへ行く」	

表 3-2 「読者が選ぶ傑作選」(1~99 巻)

順位	タイトル	下町物
1	57巻「浅草物語」	●
2	59巻「おぼけ煙突が消えた日」	●
3	71巻「勝鬨橋ひらけ！」	●
4	1巻「始末書の両さん」	
5	73巻「突撃！クレーンゲーム」	
6	92巻「親愛なる兄貴へ」	●
7	86巻「パソコン・モニタージュ！」	
8	69巻「両さんメモリアル」	●
9	47巻「江戸っ子すし講座」	
10	99巻「格闘ゲーマー警官登場」	

表 3-3 「おもしろ話ベスト 10」(1~127 巻)

順位	タイトル	下町物
1	125巻「京都ものがたり(1~3)」	
2	125巻「浅草物語 望郷編」	●
3	76巻「浅草セツ星物語」	●
4	106巻「トランプバトル再び！」	
5	102巻「古都の走馬灯」	
6	122巻「亀有老人会世界へ！！」	
7	83巻「親愛なる兄貴へ」	●
8	65巻「両さんメモリアル」	●
9	41巻「両津刑事！」	●
10	64巻「歯無しにならない話」	

以上の表により、いずれのアンケートにおいても下町を題材としたストーリーに高い評価が寄せられていることが分かった。

秋本自身も、下町の話を描くときは「映画を作っているようでとても緊張します」「思い入れがある分、身が引き締まる思いになります」と、力の入れようを語っている<sup>66)</sup>。

これは、秋本が下町空間を読者も自分も楽しめる空間として描いていることの証左といえる。

## (2)「ロボット派出所」撤去

1987年、派出所の隣に「ロボット派出所」が登場した(図 3-5、57巻「炎の男・登場!!」)。



図 3-5 ロボット派出所建設の様子

秋本は、これを「作品の幅が広がるのではないかと考え取り入れたものの、読者からは「ムードがこわれる」「下町情緒がなくなる」という強い抗議を浴びることとなった<sup>67)</sup>。

秋本は建物を純和風に作り変えるなどの試みをしたものの(図 3-6、60巻「ロボット派出所改造計画」)、読者の要望を受け容れ、1988年に撤去が行われている。

この事例からも、秋本が読者の反響を強く意識していることが分かる。



図 3-6 ロボット派出所を純和風に改築

## 3-4. 時代背景

秋本が下町描写を加速させたのは、1980年代中ごろである。これはちょうど、日本がバブル経済に沸いた時代であった。

別表 3 と対照させると、作中で「変わり行く東京」に対する不安が語られはじめたのはバブル前夜の 1984 年である。バブル経済が本格化する 1987 年になると、「変わり行く東京」を嘆く主人公の描写はさらに増えている。

また、地価高騰が深刻化するバブル絶頂期の 88・89 年頃からは、下町そのものを題材としたストーリーが頻繁に登場し、扉絵 B も急増をみた。

下町を題材とした読み切り『東京深川三代目』が連作で描かれるのもこの頃である。

1989 年には、同作で「地上げ」を題材としたストーリーが描かれ(図 3-7)、そこでは、取り壊される建物を前に、主人公が地上げを批判するシーンも見受けられる(図 3-8)。

秋本はこの頃、取材によって急激に変わり行く東京を目の当たりにしていた。そして、「10年どころか5年サイクルで変わっていきますよね、東京は。このままいくと、23区内は本当にビルばかりになっちゃって、いつか人が住めなくなるんじゃないだろうか」という危機感ないし焦燥感を抱くようになる。秋本はまさにこの「変わり行く東京」に触発され、今の風景を「残しておきたい」という意識を持つようになった<sup>68)</sup>のである。

バブル期にみられる下町描写の急増は、「下町の風景を残さなくては」と考える秋本の意識の発露であろう。バブル経済と、地価高騰によって急激に変わる東京の変化が、秋本の意識と「こち亀」世界に及ぼした影響は大きいと考えられる。



図3-7 『東京深川三代目』に描かれた「地上げ」



図3-8 地上げを批判する主人公

「そのマンションにすむ人たちはきっと知らないだろうね この土地で生まれそだった住民がバラバラにされて建てられたマンションだつてことを・・・・・・・・・・・・・・・・」

## 第4章 秋本治の表現と世界観

### 4-1. 劇画と秋本

子供の頃から漫画家を志していた秋本は、さいとうたかをらの描く劇画に強く影響される<sup>69)</sup>。秋本は当時を振り返り、「それまで読んでいた作品とは別世界。言葉は悪いけど時代が違って見えました」と語っている<sup>70)</sup>。

以降、劇画に傾倒するようになった秋本は、徹底してリアルな描写を追究するようになる。その集大成となったのが、デビュー前に1年半掛けて描き上げた戦記漫画『平和への弾痕』(図4-1、発表時『そして死が残った』)であった。



図4-1 『平和への弾痕』

重いテーマをリアルなタッチで描き上げた秋本は、その反動で「さわやかな劇画」を描こうと考えた<sup>71)</sup>。その構想で生まれたのが、「アメリカンポリス・アクション劇画」であった。

しかし3-2で示したように、秋本はアメリカンポリス劇画を断念。「日本の警察のギャグ漫画」を描くこととなる。

しかし、秋本の劇画志向は変わらなかった。投稿作を見た担当編集者に「面白いギャグを描くね、劇画の絵で」と言われた秋本が「これはギャグじゃなくて、劇画なんですよ」「コメディなんですよ」と言い返していたというエピソードもある<sup>72)</sup>。

また時を経た1996年にも秋本は、「ギャグマンガだけどリアルタッチなのは「こち亀」のカラー」と表現しており、本作のアニメ化の際にも、他には何も注文をつけず、「絵はなるべくリアルなものにして下さい」とだけ注文したことを明らかにしている<sup>73)</sup>。このことから、秋本は「こち亀」世界がリアルタッ

チであることにこだわっていることが伺える。

彼の表現する下町世界は、フィクションである漫画の中に、劇画的なリアリズムを加えた世界であると言えよう。

### 4-2. 他作品にみる秋本のメッセージ

秋本は「こち亀」以外でも精力的に読み切り作品を描いている。スパイアクション漫画から少女漫画までそのジャンルは多岐に渡るが、中には、「下町」を題材としたシリーズ作品も見られる。

1つが、東京・深川で代々続く大工の一人娘にスポットを当てた『東京深川三代目』であり、もう1つがブラジルから単身、日本にやってきた女性が廃業寸前の銭湯の看板娘となる『いいゆだね!』である。この2つから、秋本の意識を探る。

#### ①『東京深川三代目』

本作では、大工を志す女子高生・静(三代目・娘)、それを応援する棟梁(一代目・祖父)、娘には大工よりもOLになって欲しいと願う親方(二代目・父)の人間模様が人情味豊かに描かれている。

ここで棟梁は、頑固な職人でありながら「変化を受け容れる」柔軟な人間として描かれている。

例えば、外国からやってきた留学生を真っ先に受け容れた棟梁が、それに併せて食生活まで変えて周囲を驚かせる(図4-2)シーンや、地上げで住民がバラバラにされてしまったことを嘆き続ける静に対して、「今年の深川祭りにやみんな集まってくるよ 昔みたいにな! どんなに街が変わろうと人間までは変えられないぜ」と変化を前向きに捉えるシーン(図4-3)が描写されている。



図 4-2 変化を積極的に受け容れる棟梁



図 4-3 変化を前向きに捉える棟梁

ここで示されるメッセージは、「こち亀」において秋本が投影する「変化を受け容れる」下町像とシンクロするといえる。

また、作品のハイライトも興味深い。娘に OL 職を薦める父 (図 4-4) に、静は「女だから大工にむかないなんてウソだと思う」と否定 (図 4-5)、父を納得させる。それを聞いた祖父は静を呼び出し、「三代目になるなら、ドイツへ留学しろ」と命ずる (図 4-6)。



図 4-4 娘に OL 職を薦める父



図 4-5 父の勧めを断る静



図 4-6 静にドイツ留学を命ずる棟梁

父は「日本建築の大工がなぜヨーロッパに学びに行くんですか!!」と反対するが (図 4-7)、棟梁は「人に住みよい家を作るのがわたらの仕事」であり、「(外見的な) 伝統にこだわらず、広い視野で仕事を知」ることが重要だと諭し (図 4-8)、二代目を超えるために

世界に目を向けろ、とはっばをかける。



図 4-7 ドイツ留学に反対する父



図 4-8 「伝統にこだわるな」と諭す棟梁

ここからも、「肝心なのは中身」と捉える秋本の意識が見て取れるのである。

## ②『いいゆだね!』

本話は、間もなく廃業を迎える下町の銭湯・熊乃湯を舞台としたストーリーである。

銭湯廃業の日、ブラジルへ旅立った銭湯経営者の息子の嫁・マリアが、単身で来日。熊乃湯で働く虎五郎とその孫は、銭湯で働く意欲をみせるマリアを快く受け容れる。

持ち前の明るさでマリアは熊乃湯の看板娘となり、銭湯が徐々に立ち直っていくという構成となっている。

「下町の銭湯」と「ブラジルの女性」を組み合わせるという発想は秋本ならではのものであるが、何より、本話に登場する登場人物たち (銭湯で働く人間、銭湯を訪れる街の人々) が「ブラジルの女性」を受け容れる様は、秋本の理想とする「変化に寛容」な下町像そのものであると言える。

以上①・②で示されたように、秋本の抱く下町像は、「こち亀」以外の作品においても一貫したものであることが分かった。

### 4-3. 原体験としての下町

秋本は生まれてから現在まで、一貫して亀有に在住している。そんな彼の定義する下町は「懐かしさに溢れた場所」<sup>74)</sup>である。

「懐かしさ」とは、郷愁、すなわち原体験への追憶に他ならない。事実、秋本はこのよ

うに振り返っている<sup>75)</sup>。

「マンガに関しての一番の基準軸は自分の子どもの頃なんですね。子供の頃に見ておもしろかったと感激したもの、そういうものを描きたいという……。」

「こち亀」に描かれる下町は、秋本が幼少の頃から亀有に住み続けているという原体験に裏付けられた空間であると言える。

そして秋本は、その原体験に基づく「懐かしさを感じさせる下町」が「将来も残り続ける」ことを理想とし、そのための意気込みを次のように述べている<sup>76)</sup>。

「(外見的に)新しいものを取り入れる一方で(内面的な)古いものも残していく(中略)そういう形で未来に向かって懐かしいものを引き継いでいく方法が、僕はまだあると思う(中略)懐かしいものを大事にして残すようなことを続けていけば、どんどん東京が新しくなる一方で、下町もまた残るのではないか。そのためにも僕は『こち亀』で下町を描き続けたい」

この、懐かしさを持った下町を残したいという思いが、秋本に「下町の描き手」としての意識を促している。

秋本にとっての「懐かしさ」は、単なる郷愁にとどまらず、また因循なものでもない。変化を受け容れつつ、未来に向かって残していくべきものなのである。

## 第5章 結論

### 5-1. 研究のまとめ

本研究は、「こち亀」における下町描写の特徴と、描写に込められた秋本の意識を明らかにするとともに、下町描写ならびに秋本の下町に対する意識の変遷を追ったものである。

第2章では、秋本の描く下町空間の特徴を「シーン」と「カット」に分けて分析した。

結果、シーンにおいては日常ベースの下町がコンスタントに描かれる一方で、「肝心なのは中身が変わらないことであり、外見的变化は受け容れる」という、変化に寛容な下町像を理想とする秋本の意識が投影されていることが明らかとなった。

一方カットにおいては、8割がストーリーと無関係な描写であるという特徴がみられ、そこには「変わり行く下町の風景を残したい」とする秋本の意識が込められていることが分かった。

第3章では、「こち亀」における下町描写および秋本の意識の変遷過程を視覚化した。

下町描写についてみると、1979年を境に、秋本が意識して下町を描写するようになったことが明らかとなった。また1980年代中盤になると、作中に秋本の理想の下町像が投影されるようになるなど、年を追うごとに下町描写が深化していく過程が明らかとなった。

秋本の意識についてみると、秋本自身は当初は下町を描くことに興味がなく、読者の反響を受けて下町を描くようになったと自覚するが、実際は、秋本が当初から下町空間を無意識的に好んで描写していたことが判明した。

第4章では、秋本の表現方法と世界観を検討した。

秋本が下町世界を劇画に基づくリアルな視点で描いていることが分かったとともに、その下町空間は、秋本自身の原体験に基づいて描かれていることが示された。また秋本の下町空間に対するメッセージは、他作品におい

ても一貫していることが分かった。

### 5-2. 総合的考察

秋本は当初から、自身の原体験を投影して無意識的に下町世界を描いていたと考えられる。読者が誘因となって下町空間を描いているということが自覚されるようになってからは、次第に秋本の理想の下町空間が作中に投影されるようになった。

秋本の理想とする下町空間は、「懐かしさが将来も残り続ける」空間である。

それは過去志向でなく、「古いもの・懐かしいものを残しつつ、新しさを受け容れ、未来に向かって引き継いでいく」という変化に寛容な世界である。この世界観に拠って立つ「こち亀」の下町空間は、秋本自身がそのような下町空間を体感してきたからこそ描ける、リアルに根ざした「理想の世界」であると言える。

その理想を体現するために『こち亀』を描き続けたい」と語る秋本は、変わり行く下町の過去と現実をただ見つめるだけでなく、その未来に積極的に関わろうとする実践者である。

「懐かしさが残り続ける」こととは、「都市が受け継いできた記憶が、次代に繋げられていくこと」である。しかし秋本の考える理想の下町は、懐かしさだけにこだわる意固地なものではなく、一方で新しいものをただそのままを受け容れるというものでもない、中庸の取れた世界である。「こち亀」が長く支持を受けている理由の1つは、このバランスある世界観にあると言えるだろう。

## あとがき

---

私は、人々が都市空間において抱くイメージに興味を抱いてきた。

現実の都市空間においても、メディアや記号上の架空の都市空間においても、都市空間に抱かれるイメージとは、その空間に住んだり集ったりする人間が表現したものを別の誰かが表象したものの集積である。都市という人類の財産の中から人々の描くイメージ群を抽出することは、今、自分達が立つ世界の文脈を読み解く意義深い試みであると考えられる。

そのような背景の下、本研究は「週刊少年ジャンプ」という激戦区において連載記録を伸ばし続ける『こちら葛飾区亀有公園前派出所』に描かれた下町空間を分析した。「こち亀」を通じて人々に支持されてきた下町空間とはどのようなものか、その一端が明らかになったことは有意義なことであったと思う。

また今回の研究を通して、私は「こち亀」世界の持つ魅力により深く迫ることができた。研究の過程で、これだけの人気を博する作品にも関わらず、これまで「こち亀」に対する研究そして評価が全くといっていいほど進んでいないことを知り、私は驚きを禁じ得なかった。

漫画家の里中満智子は、手塚治虫文化賞（注：「こち亀」は未受賞）の推薦コメントで、「一見バカバカしく見える世界をここまで誠実にかつ努力して描きつづけるのは並々ならぬ力量。玄人うけから遠いところにいるのが少しせつない、とつねに感じている。」（2001年）と評している。私もまったく同感である。

殆ど研究されてこなかった「こち亀」の30年に及ぶ歴史を、誰かが抉り出さなくてはならない—この衝動が、心の底から湧き上がった。本研究は、この衝動によって達せられた面も大きい。

したがって今回、「こち亀」に描かれた世界を網羅的に把握し、かつ、その魅力に迫れたことは、いち研究として新奇的な意義を呈することができたと考えられるだけでなく、私自身にとっても誠に大きな経験であった。

本論文の作成に当たっては、W大学S先生に多大なる御教示をいただきました。テーマの紆余曲折を繰り返す私を叱咤激励し、懇切なご指導を与えてくださったことに衷心より御礼申し上げます。また、論文作成の過程でお互いに学び、励まし、研鑽しあった友人各位にも、心から感謝致します。

2006年2月  
ううせいじん

## 注釈

1) asahi.com の記事「両さん、浅草で石碑に 漫画「こち亀」1億冊突破で計画」参照。なお、集英社の公称部数（「ジャンプ」および単行本のビラ）は「1億3000万部」である。URLは、<http://book.asahi.com/news/TKY200507100086.html>

2) 斎藤（1996）、西村（1999）。毎週、雑誌に懸賞つきのアンケート葉書を綴じ込み、読者に全掲載作品（表紙や企画記事も含む）の中から「おもしろかったもの3つ」を選んでもらって集計する。その結果（人気順位）が、連載の継続を決定する重要な指針となる。なお西村が「ジャンプ」編集長だった80年代中頃、「こち亀」の人気は常に「7, 8番目」という安定型で（連載作品は20数本ある）、これより下位の作品はいつ入れ替えても良いという「人気のバロメーター」だったという。

3) 斎藤（1996）p.116 および「こち亀」80巻巻末の藤子・F・不二雄の解説。

4) 藤子（1998）は生前、「人気のあるまんがをかくということは、けっして読者にこびることではありません。小手先のテクニックで（中略）は、作れないのです。人気まんがというのは、どういうまんがであるか。それは、まんが家の表そうとしているものと読者の求めるものとが、幸運にも一致したケースなのです。つまり、大勢の人が喜ぶということは、共感を持つ部分が、そのまんが家と読者との間にたくさんあった、ということです」との言葉を遺している。

5) 斎藤（1996）pp.116-140 では主人公である両津勘吉巡査長の「少年性」がこち亀の人気の秘密であると分析している。

6) 「わしづム」pp.81-93。秋本と「ジャンプ」で同期の漫画家小林よしのりとの対談で、「こち亀」が「オーソドックス」な「古典芸能」と評されている。

7) 「カメダス」p.614、「他の人はそこまで（取材）しない」と担当編集者の評。

8) 「こち亀」90巻巻末解説で漫画家・赤塚不二夫が「アクションは小学生向け、セリフの面白さは中高生向け、テーマは大学生向けという要素を持っている」と評価。また、秋本自身が、お父さんお母さん世代が読みやすいように配慮している旨発言している（「わしづム」pp.81-93）。

9) 漫画文庫版「こち亀」7巻でデーブ・スペクターが「時事性がある」と評価。また、秋本自身も、「時代の流れに身をまかせ」たことを作品が続いた理由の1つと考えている（「ジャンプ」1996年52号作者インタビュー）。

10) 「ジャンプ」1996年50号作者インタビュー、秋本（2004）p.24

11) 秋本（2004）p.222

12) この事実は、秋本（2004）pp.24-26 および「カメダス2」pp.176-184、「ジャンプ」1996年50号作者インタビュー、「このマンガがすごい！」pp.114-121の作者インタビューなどにおいて確認できる。

13) 西村（1999）巻頭辞。

14) 本研究で取り扱う「こち亀」の発表原稿総数は、1話20頁で計算すると28000頁を超える莫大な量となる。

15) 本研究では、単行本ベースで計算を行っている。話数は、以下の理由で単行本と「ジャンプ」誌とで2話の誤差が生じている。①20巻「真夜中のパイロット！の巻」、21巻「メンソーレの巻」、21巻「本ロリカ登場の巻」、35巻「東京留学！の巻」は雑誌掲載時2話だったものを1話に結合している。②逆に単行本に独立した1話として掲載されている32巻「おいらは、かぜさ！の巻」は雑誌掲載時には「コピー社会の巻」の1部として、69巻「新たなる旅立ちの巻」は雑誌掲載時には「両津メモリアルの巻」の1部として雑誌に掲載されていた。

16) 以下は話数にカウントせず、参考扱いとした。

①「ジャンプ」連載作品のうち単行本未掲載の25話（2006年1月現在）、②表現規制を受けた4巻「派出所自慢の巻」の代わりに差換えで掲載されている「野球狂の男の巻」、③特別描き下ろし「日暮2号！？登場の巻」、④特別読切「真夜中のランデブーの巻」「両さんのサマーtravelの巻」、⑤集英社「りぼん」誌の付録に掲載された番外編。

17) 以降本研究では、各話のタイトルの「～の巻」の部分省略して表現する（例：「始末書の両さんの巻」→「始末書の両さん」）。

18) 本論文で取り上げる「下町空間」は、秋本の定義に基づいた。通常、下町とは東京東部の低地帯地域（千代田区・中央区・台東区・江東区・墨田区など）を指すが、本研究では、秋本が「僕たち住民は葛飾区・足立区・荒川区・江戸川区辺りも含めて下町と呼び習わしてきました」（秋本、2004:12）とする点を考慮している。

19) 秋本（2004）および「カメダス」「カメダス2」「ジャンプ」に掲載された作者インタビューほか。

20) 夏目（1992）、大野（2000）、安恒ほか（2003）。

21) 米沢（2002）など。

22) 夏目（1992）、スコット・マクラウド（1998）

など。

23) 代表的なものとして、『サザエさんの秘密』『ドラえもん』の秘密』など。

24) 斎藤 (1996) pp.116-140。

25) 真田 (1999)、山崎ほか (2004)。

26) 島見ほか (1994)、矢部ほか (1995：日本建築学会)。

27) 高木ほか (1999)、靱山ほか (2004)。

28) 矢部ほか (1995：日本都市計画学会)。

29) 森川 (1998)

30) 宮本 (2000) では、浜岡賢次の描くギャグ漫画『浦安鉄筋家族』の舞台である浦安 (千葉県) がどのように描かれているかを検証している。

31) 「シーン」とは、実際に物語が展開する空間であり、以下のようなものを指す。



84 巻「現代昼食事情」、主人公の帰宅風景

32) 「カット」とは、扉絵・挿絵のことを指す。

○扉絵 (例：85 巻「新説桃太郎！」)



○挿絵 [左側のコマ] (例：79 巻「バスルーム狂騒曲」)



なお挿絵とは、あるシーンと別のシーンをつなぐ「場面転換」に用いられるカットのことである。

33) 秋本 (2004、pp.3-4) で秋本は、「まんが作品には表紙というものがあり、これがなかの物語に入る前の重要なポイントになっています

(中略) 表紙は別名扉絵といい、まさしく扉を開けて (引用者注：作品本体が) 読まれるか？ 扉を閉めたまま読まれないか？ . . . . .

となってしまいますから、それだけにまんが家にとっては力が入る部分であり、特に絵やイラストが得意な作家にとっては見せ場になるわけで、カラーの扉絵となれば映画のポスター並みに凝る人も多くいます。(中略) 本編のために下町を取材に行き、撮ってきたいい写真を使おうと思っても、毎回 19 ページの作品ですから大

きな背景のコマには使えません。小さな背景のコマには使えても、写真の半分以上が未使用となってしまいます。そこで考えたのが「扉ならば 1 ページ丸ごと使える！」「そこに両さん (引用者注：主人公の両津巡査長) のキャラクターを入れれば、下町案内みたいになる！」ということでした。それからは写真を撮るのが面白くなり、本編よりも (?) 力を入れた扉絵も出てくるほど愉しみな作業になりました。」と語っている。

34) 「シーン」のタイプ 8 種類は、それぞれ以下のようなものを指す。

A：日常風景を描いたもの



主人公の通勤風景 (89 巻「1994 年米騒動！」)

B：祭りを題材としたもの



浅草・三社祭の様子 (65 巻「大江戸神輿大騒動」)

C：思い出・人情話



少年時代の風景 (114 巻「トロバス物語」)

D：下町を題材としたギャグ



町内戦闘機レース (9 巻「スクランブル・レース」)

E：メッセージ性の強いもの



作者の意見の代弁 (1 巻「気の合うふたり！？」)

F：下町案内



作中で柴又案内（66巻「柴又の思い出」）

G：時事テーマ



土地不足に喘ぐ交番（63巻「東京土地なし派出所」）

H：その他



両津が撮影したビデオに映った下町風景（62巻「ビデオ狂騒！？」）

35) いずれも秋本（2004）。亀有につき pp.11-50、浅草につき pp.66-94、上野につき pp.123-162、神田につき p.184。

36) 「タイプA」および「タイプB」の違いは以下の通りである。

●タイプA（本編と場所上の繋がりがああるカット[左側のコマ]）



66巻「柴又の思い出」より。ここでは、場面転換の際、本編と関係のあるカットが描き込まれている（本編は「銭湯に向かう」という構成であり、それに併せてカットが描かれている）。

●タイプB（本編とは無関係のカット[左側のコマ]）



83巻「携帯電話魔！」より。場面転換時に、本編とは無関係のカットが描きこまれている。

37) 秋本（2004）pp.3-4、注33)参照。

38) 秋本（2004）pp.244-246、『カメダス』pp.580-581。

39) 秋本（2004）p.246

40) 秋本（2004）p.222

41) 両津の思い出話シリーズは以下の通り。

両津の思い出話(少年時代)シリーズ		
年	巻	タイトル
1980	20	ガキ大将！勤吉
1982	31	思い出写真
1984	41	両津刑事！
1987	57	浅草物語
1988	59	おぼけ煙突が消えた日
	61	我がなつかしき少年時代
1990	69	両さんメモリアル
	71	勝鬨橋ひらけ！
1991	76	浅草セツ星物語
1993	82	光の球場！
	87	友情の翼！
1995	97	浅草シネマパラダイス
1996	102	古都の走馬灯
1996	108	遠い放課後
1999	114	トロバス物語
2002	130	東京銭湯絵巻
2003	136	ぼくたちの東京タワー！
2004	141	希望の煙突
2005	146	出会いの橋

42) 東京のお祭りシリーズは以下の通り。

東京のお祭りシリーズ		
年	巻	タイトル
1976	1	祭りとフータロー
1977	6	祭り太鼓
1979	15	祭り気分！
1986	48	ハッピー熊手！
1989	65	大江戸神輿大騒動！！
1994	89	大江戸下町祭
1996	101	佃島本祭り取材！
1999	118	江戸っ娘・擬宝珠 纏
2000	121	聖橋白線流し
2001	126	祭りの日に… 纏の少女時代編
2002	131	檸檬初三社祭
2003	137	爆走神田祭

43) この時期の記述は、「ジャンプ」1996年49～52号、『カメダス』『カメダス2』、秋本（2004）、『このマンガがすごい』における秋本のインタビューや発言などを基に構成した。

44) 当時、山上たつひこの警察官ギャグ漫画『がきデカ』が好評を博していたことによるパロディ・ペンネームであった。山上のクレームもあり、1年後に現在の「秋本治」を用いる。

45) 秋本（2004）pp.26、「ジャンプ」1996年50号作者インタビュー「人情派両さん誕生秘話」。

46) 「ジャンプ」1996年49号作者インタビュー「なんで、わしは生まれたんだ！？」。

47) 「ジャンプ」1996年49号、同上。

48) 「ジャンプ」1996年49号、同上。

49) 「ジャンプ」1996年50号作者インタビュー

- 一「人情派両さん誕生秘話」。
- 50) 「ジャンプ」1996年50号、同上。
- 51) 秋本(2004) p.26、「ジャンプ」1996年50号、同上。
- 52) 秋本(2004) p.26
- 53) 秋本(2004) p.26、「ジャンプ」1996年50号、同上。
- 54) 「ジャンプ」1996年50号、同上。
- 55) 秋本(2004) p.26
- 56) 秋本(2004) p.26
- 57) 『カメダス』p.581
- 58) 注12)参照。
- 59) 秋本(2004) p.34
- 60) 秋本(2004) pp.70-72
- 61) 『秋本治傑作品集・中巻』作者解説
- 62) 「ジャンプ」1996年52号「「こち亀20年」作者特別インタビュー」
- 63) 『カメダス』pp.634-635で発表。
- 64) 「ジャンプ」1996年52号で発表。ここでは10位までを示したが、「ジャンプ」誌上では50位まで発表されており、11位以下も下町を題材とした7作品がランクインしている。特に、11位～14位は全て下町を題材とした作品であった。
- 65) 『カメダス2』p.537で発表。
- 66) 「ジャンプ」1996年52号、同上。
- 67) 「こち亀」60巻「ロボット派出所改造計画」。
- 68) 『カメダス』pp.580-581、秋本(2004) pp.245-246。秋本の発言は『カメダス』p.582。
- 69) 『カメダス』pp.584-587
- 70) 『このマンガがすごい』pp.115-116
- 71) 『カメダス』p.587、『このマンガがすごい』p.117。
- 72) 『カメダス』p.583
- 73) 「ジャンプ」1996年50号インタビュー。
- 74) 秋本(2004) p.12, 50
- 75) 『カメダス』p.620
- 76) 秋本(2004) p.222

## 参考文献

---

### ■コミックス

- 秋本治 (1977-2006) 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』 1~148 巻、集英社  
秋本治 (1991) 『東京深川三代目』、集英社  
秋本治 (1996) 『こちら葛飾区亀有公園前派出所・読者が選ぶ傑作選 特別注文』、集英社  
藤子・F・不二雄 (1998) 『自選集ドラえもん』、小学館

### ■コミック文庫

- 秋本治 (1995-1999) 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』 全 26 巻、集英社  
秋本治 (1999) 『秋本治傑作集』 上・中・下巻、集英社  
秋本治 (2000) 『こちら葛飾区亀有公園前派出所 ミニ』 全 4 巻、集英社

### ■書籍

- 夏目房之介 (1992) 『手塚治虫はどこにいる』、ちくまライブラリー  
週刊少年ジャンプ・編 (1993) 『カメダス こちら葛飾区亀有公園前派出所大全集』、集英社  
世田谷サザエさん研究会 (1993) 『サザエさんの秘密』 データハウス  
世田谷ドラえもん研究会 (1993) 『ドラえもんの秘密』 データハウス  
斎藤次郎 (1996) 『少年ジャンプの時代』、岩波書店  
西村繁男 (1996) 『さらばわが青春の「少年ジャンプ」』、飛鳥新社  
山本和夫 (1997) 『漫画家 この素晴らしき人たち』、サイマル出版会  
スコット・マクラウド・著、岡田 斗司夫監訳 (1998) 『マンガ学 マンガによるマンガのためのマンガ理論』、美術出版社  
西村繁男 (1999) 『まんが編集術』、白夜書房  
大野晃 (2000) 『手塚治虫・<変容>と<異形>』、翰林書房  
週刊少年ジャンプ・編 (2001) 『カメダス2 こちら葛飾区亀有公園前派出所大全集』、集英社  
米沢嘉博 (2002) 『藤子不二雄論 F と A の方程式』、河出書房新社  
夏目房之介・編 (2003) 『マンガの居場所』、NTT 出版  
安恒理・吉田浩 (2003) 『「手塚マンガ」の読み解き方』、日本文芸社  
秋本治 (2004) 『両さんと歩く下町』、集英社  
成美堂出版編集部・編 (2005) 『最新 東京・首都圏未来地図 超拡大版』、成美堂出版  
宝島社・STUDIO HARD DX・編 (2005) 『このマンガがすごい! 2006・オトコ版』、宝島社

### ■雑誌

- 集英社「スーパージャンプ」1994年15・16・23号  
集英社「週刊少年ジャンプ」1996年49~52号、2005年48号~2006年9号  
幻冬舎「わしづム」2002年 Vol.1

### ■評論

- 斎藤次郎 (1996) 「連載最長不倒記録の秘密 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』 少年ジャンプの

時代、pp.115-140

森川嘉一郎（1998）「ラブコメ都市東京 マンガが描く現代の<華の都>」（→Web サイト上に同著者が転載したもの <http://homepage1.nifty.com/straylight/main/LCtokio/LCTtxt.html>）、元は INAX 出版「10+1」No.12

宮本大人（2000）「『浦安鉄筋家族』の浦安」、マンガの居場所、pp.136-137

## ■論文

島兎伸次・仲間浩一・岡田昌彰（1994）「歌謡曲の情景描写からみた駅空間のイメージに関する基礎的研究」日本都市計画学会学術研究論文集、No.29、pp.589-594

矢部恒彦・北原理雄・徳山郁芳（1995）「小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究」日本建築学会計画系論文集、No.472、pp.111-122

矢部恒彦・北原理雄（1995）「マンション広告テキストの記号論解析」日本都市計画学会学術研究論文集、No.30、pp.241-246

真田純子（1999）「エッセイにみる都市解釈の枠組みに関する研究」日本都市計画学会学術研究論文集、No.34、pp.391-396

高木清江・松本直司・齋藤達哉・瀬尾文彰（1999）「新聞記事における都市空間の記述過程—名古屋市の事例—」日本都市計画学会学術研究論文集、No.34、pp.397-402

山崎隆之・十代田郎（2004）「地域イメージの表現手法に関する研究—司馬遼太郎『街道をゆく』における文章構成の分析から—」日本都市計画学会学術研究論文集、No.39-3、pp.97-102

初山真人・十代田郎・羽生冬佳（2004）「東京における『都市情報誌』に登場する広域集客型エリア内部の商業的・空間的特性」日本都市計画学会学術研究論文集、No.39-3、pp.157-162

## ■ウェブページ

(2006年1月アクセス)

「POP WEB JUMP」 <http://jump.shueisha.co.jp/>

「こち亀.com」 <http://www.j-kochikame.com/>

「インターネットカメダス」 <http://kamedas.jp/index.php>

「こちら葛飾区亀有公園前派出所データベース」 <http://www.maxaydar.net/kame/>

「電通 消費者情報トレンドボックス」 <http://www.dentsu.co.jp/trendbox/adkeizai/>

「J-MAGAZINE」 <http://www.j-magazine.or.jp/FIPP/FIPPJ/F/>

「ジャンプコミックス新刊案内」 [http://comics-news.shueisha.co.jp/common/j\\_shinkan/](http://comics-news.shueisha.co.jp/common/j_shinkan/)

「手塚治虫文化賞」 <http://www.asahi.com/tezuka/>